

$$\frac{\text{Sal}}{\text{Fem}} > \frac{7}{1} \therefore \text{Class 1}$$

$$\frac{Q}{F} < \frac{1}{7} \therefore \text{Order 5}$$

$$\frac{\text{K}_2\text{O}' + \text{Na}_2\text{O}'}{\text{CaO}'} < \frac{7}{1} > \frac{5}{3}$$

∴ Rang 2

$$\frac{\text{K}_2\text{O}'}{\text{Na}_2\text{O}'} < \frac{5}{3} > \frac{3}{5}$$

∴ Subrang 3

露西亞の領土と人口

(一九二六年國勢調査の概観)抄譯

ベンヂヤミン・セメノフ・チヤンシヤンスキ

(ジヨグラフキカル・レツキウ十月號所載)

一、
コロンブスの新大陸發見の後、歐洲の國民は西の方アメリカへ、東の方亞細亞へ、いづれも廣大な植民地を建てはじめた。P. P. Semenov-Tian-

Shansky は十五世紀の終から、十七世紀までの間に、これら兩地方への西歐移住民を計算した結果、その七十二%は新大陸へ残りの二十八%は東方ユーラシア大陸(フィンボルトの語である)

の内部へ移住した。さうして後者、主にスラヴの東方移住といふことは、今日まで西歐の人や米國の人にあまり注意を拂はれてゐないが、しかしもしこのスラヴの東漸といふことが、全然無かつたとしたらばどうであつたか。恐らく西歐の諸國は、アジアからの東方民族の西漸することによつて争闘に走らねばならず、従つてアメリカへなど容易に移住は出来なかつたのではなかつたか。幸にスラヴが歐亞の間に一大障壁として存してゐたればこそ、西歐諸國はその文化を純粹に維持發達せしめたのではないか。十五世紀に於けるフンヌ王の侵入がいかに西歐を震撼したか、其後に於ても G. E. Grun Grzimalio の著書 *Western Mongolia and Uriankai* を見るならば、いかに東方遊牧民族の強暴であることを知りうるではないか。しかし西歐諸國はロシア帝國の勃興に對して絶えず干渉を試みたものである。就中一八一二年の奈翁の侵入の如き最も著しい出來事であつた。しかし自然の地理的事實は遂にさうした何回となき西歐の企てを満足

さしてゐない。ロシアは征服し得ない。たとへロシアに戰勝しても、ロシアはさきへさきへ、手の届かぬ所へ逃げてゆくであらう」とは一九一六年に澳地利の捕はれた兵士が、西比利亞から故郷へ知らした文句ではなかつたか。

二、

ロシアの東方侵出は當然アジアの遊牧民族と戰爭を惹起したが、遂にはさうしたすべてを版圖に入れた。アラスカが露領であつた時、其の領土は *Kalisz* から *Adams* 山まで延長一一、〇〇〇 軒に達した。今日でも *Proskov* から白令海峡まで直徑九〇〇〇 軒はある。こんな廣大な版圖は歴史あつてから未だ嘗てなかつた。中世の蒙古大帝國も七〇〇〇 乃至八〇〇〇 軒しかなかつたし、古い支那、波斯、マケドニアなどの大帝國もしくは現今の版圖である米國でも加奈陀でも、その長徑は五〇〇〇 乃至六〇〇〇 軒に過ぎない。

過去の大國中で回教帝國の如きは、氣溫の年平均攝氏十度乃至三十度の間に位し、蒙古大汗

の國といへども攝氏〇度乃至三十度の等温線の地域に止まつてゐたが、しかしロシアの現版圖は〇下二十度から、攝氏二十度の間の等温線の間に廣がつてゐる。かうした廣さの地續きの國は、世界に二つとはない。カナダでさへも較差三十度、米國にアラスカを加へた所で三十八度支那では三十度以下の氣温の差がある位に過ぎない。

三、

そこでかうした年平均の等温線圖をみると明かなやうにソヴェエトロシアの版圖の半は、現に半年以上降雪地である。残りの地でも夏期最高二十度の平均に達するところが少いから、一年の三分一は氣候の變移期中にある。春といへど、雪解の爲めに道路は悪く河水はあふれるといふ永き不快な時節がつき、秋といへば雨期になるのでこれ又道路は悪い。加之ならずソヴェエットの全版圖は北の方が地理學的に明け放しであるから、時々きつい寒冷に後戻りさせられる。従つてロシアの北部の大半は凍土で

ある。それは恰も北米の北方海岸に似てゐる。このことは農業の發達に妨害を與へる。ダズムルマンの海岸黒海又は裏海の邊線で、極めて狭い所だけが年中氷らないでゐる位である。之を加奈陀の如き太平洋岸に於て長い不凍の海岸をもつことは、たとへ太平洋岸が凍つても、その内陸の温度がひくゝとも、實に比較にならぬ天恵である。カナダでの寒極攝氏四十度以下は北グリーランドにあつて、加奈陀にはないが、ロシアにはヴェルホヤンスタの寒極が、國內に横はつてゐるではないか。森林のない不毛地はソヴェエトロシアでは、北海岸のみでなく、裏海や黒海の附近に於ても、非常に廣漠な不毛地がなる。年雨量三百耗以下の處では砂漠又は亞砂漠地になる。かうした天恵の少い土地に於てそれが歴史の上に反映せないではおかぬ。故にスラヴ人の東方への運動に伴つての文化が低いことや、その進歩の遅々たるも止を得なかつたのである。

しかし既に古くEliase Reclusが云つたやうに

スラヴ人はその環境への適應性が強い。スラヴ人はその東方侵入に當つて、森林中の原住者、又は極北の住民や、或は砂漠の牧民とさへも容易に混血した。アメリカに渡つたスペイン人と同じやうに、その土地のものと混血した。但し西班牙人の相手であつたアメリカインディアンのアツテック、又はインカ帝國の如きは、既に非常に開明な文化人であつたけれども、スラヴの當面したものはその文化は實に低級のものばかりであつた。とにかくいろいろの困難があつたけれども、Woelkovが指示したやうに、スラヴ人は、高緯度に稠密に分布したものはない。ピーターズブルクは攝氏四度の年平均氣温の等温線が通過する位置にあるにも拘らず、大戦前既に人口二百萬の大都會であつたことが之を証する。

四、(版圖及人口の焦點)

大露西亞の發祥の中心地は東歐平原の中心であつてヴォルガとオカ河の間の三角地であり、そこにモスコウといふ首邑があつた。この中心から四方に出た途の長さは各方面一樣ではない

が、いづれも海に達した、北氷洋、黒海、裏海及び太平洋がそれである、しかしその版圖は或は廣い時もあり、狭められた時もあるので版圖及人口の中心はたえず動いた、一八九七年の國勢調査の結果を、その後メンデリーフが計算し、ワインベルグが更訂して、モスコバイト國家の創立から一九一四年に至る迄の版圖や人口中心の移動を報告した。ついで一九二六年に有力な國勢調査が行はれた。それは予の監修の下に多くの人の助力を得て、ソヴィエツト聯邦のさうした版圖や、人口や、經濟の中心を求めたのである。

版圖中心の東方への移動は、特に十七世紀及十八世紀初の年に著しかつた、その時ロシアコサックがアラスカを征服したからである。十八世紀に於ての地理的中心は殆どエニセイ川とレナ川の分水界に位した。その後領土は西及南に擴がつたけれども東の方でアラスカを米國に賣つた(一八六七)、そこで中心は南に移つて、一九一四年にはトムスクに達した。著しき領土の

減少は一九一八年北西地及南西部に行はれ、フィンランド・エストニア・ラトビア・リツアニア・ポーランド・ベツサラビア・及アルメニアの一部とアジャリスタンの一部を失つた。しかしこの一九一八年に失つた地は、全體から見るとは細い帯の如きものである。そこで現在の中心はオビ川とエニセイ川の間にある、トム川の東岸に存する。

人口中心の歴史的移動はモスコウから南東の方への動きであつたが、領土の動きに比して極めて緩慢である。十四世紀の初から二十世紀の初迄凡五百年間に人口の中心はモスコウからタムボブまで僅かに四百軒弱しか動いてゐない。

南方への移動は人民が黒土帯に移つたためであるが、こゝでは遊牧の民の抵抗をうけた。十六、七世紀の間、これらの遊牧の民と戦争をした時代に、ロシアの植民共は木柵をつくり土壘をつくつて、彼等の侵入を防ぐために大森林を通しての防壁をつくつた。この見張りの柵はドニープル川の支流デスナ川から、ウラルを越え、

アルタイに達した、その長凡そ三千軒。恰も支那の萬里長城のそれに比すべきものであつた。蓋しこの種の木柵や木造堡壘の残りは、革命以前ヤクーツクの北方遙の森中に於て見られたものであつたがこの際一つの塔をのこして、他の堡壘は燃料につぶしてしまつたといふことである。

かやうな見張の柵が出来るといふことは、其後方に移民の集中地をつくるものである。同時に東シベリア地方でも、同様な要塞的保護の下に植民をした。さうした結果、人口の中心がモスコウから南東に移動したのである。

一九一八年に人口密度の高いポーランドが失はれた、故に一九二六年に於て中心地は東南東の方面に速かに移轉した、現在はヴォルガ河畔の獨逸人共和國の地上にうつてゐる。かやうに歴史上地理上の理由から、ロシアの領土の中心と、人口密集の中心とは三千軒からの距りがある。しかし米國ではこの兩者の差僅に百軒に過ぎない。蓋しロシアはシベリア移民を奨励して

この差を短縮せねばならぬのである。

五、

ソヴイェット聯邦内の住民は一六九の民族から成立し、これを十大群に分ちうる。印度歐羅巴人に屬するもの三六族、ヤベテ又は高加索民族に屬するもの四〇族、セミチツク種六、フィン種一六、サモエード一、トルコ種四八、蒙古種三、ツングース(滿洲種)六、古代アジア種九
古代文化を有せる極東種四(これは科學大學最近の調査である)。

かやうに種々異つた人種民族を一つゞきの陸の中に持つ國は世界に稀な例であつて、この中で白色人種は全人口の四分三をしめ、黄色人種は四分一にすぎない。従つてこの國は歐洲文化國の中に列する。勿論著しき東方文化の要素がないではないが、主としてスラヴオニツク素が到る所に於て勢を持つてゐるのである。人種の差が地方の境を決定して、スラヴの本體から分裂することがないではない、例令ばバスキルやプリアートやコーカサス共和國の如きこれであ

るが、しかしこれとて大して國基を動かす程のものではない。

六、

一九二六年の國勢調査によれば、ロシヤの人口は一四六、〇〇〇、〇〇〇人である、世界戦争や、内亂や革命の結果、其版圖から二千七百萬人もつ土地を失ひそれをフィンランド、エストニア、ラトビア、リツアニア、ポーランド、ルーマニア、トルコ等の七國に合せられた、加ふるに病氣や飢饉があつたにも不拘、ロシヤは之を三十年前、一八九七年一月の調査による人口一九、二〇〇、〇〇〇人に比して、現に一千七百萬人の増加を示した。但しこの人口の増加は不平等に分布されてゐる。その一六四%は極東に於て、一四〇%はシベリアに於て、五八%は北コーカサスに於て増加した、蓋しこれらの土地は開發中の地であるからであつて、その土地での人口出生は少いのである、過去に於ては一歳未満の幼兒の死亡率が多かつた、しかしこの事實は近頃追々改善されたから、將來は樂觀してよ

い。ロシア平原の中央部での増加は二四%、ウ
スベクやトルコマン共和國では二八%ダゲスタ
ンでは八%である、これはこの地方の一九二一
年の飢饉のためである。サマラでは一八%、ヴ
オルガの獨逸人共和國では一七%、ウラル州及
オレンブルグのトロイツク地方は一六%、タタ
ール共和國では一四%、バスキル共和國では一
二%の増加率である。

猶又聯邦別に述べればロシア共和國の人口は
一〇〇、五〇〇、〇〇〇人。ウクライナは二八、九
〇〇、〇〇〇人。トランスコウカシアは五、八〇
〇、〇〇〇人。ウスベクは五、一〇〇、〇〇〇人。
白ロシアは四、九〇〇、〇〇〇人。トルコマンは
一、〇〇〇、〇〇〇人である。

七、

つぎに男女性別の分布を考へてみると、一八
九七年にロシアの男女数は平均してゐた。國の
西部の北半部は人種に關せずして女が多く、南
は之に反した。これは氣候の影響の有力な事を
語るものである。男の子と女の子とを比べると

寒くて濕潤な氣候に起りやすい加答兒性の病氣
に對し、女性の方が抵抗力が強いからである。
一八九七年に歐洲ロシアに於て女子超過の限界
線は、年平均攝氏七度の等溫線に一致した。し
かし一九二六年の調査では、この線が南に下つ
て攝氏十四度の線にかはつた。これは一九一四
年から一九二一年の間この國を襲うた流行感冒
に男子が多くやられた結果と見てよい。トラン
スコウカシア丈けは、あまり差がなく残つた。
即一八九七年に男子五四%であつたが、一九二
六年には五〇、八%である。

アジアロシアは十六世紀の後半、即最初に植
民されたトボリスクを外にして、すべて一八九
七年には男子が超過した、これは新しい開拓地
であつたからである。太平洋岸で男女の比は六
八・四對三二・六の割合であつた。サハリン島で
は更らに女が少くて、七二・九對二七・一であつ
た。しかし現在はその趣が變つてシベリアを通じ
て、男五〇、九、女四九、一といふ比に増加した。
ブリアートモンゴルでは男女殆ど同數であるけ

れども、バイカル以東では男の數が多い。極東共和國では男五二、五女四七、五である。ヤクーツク共和國では男五四、女四六である、こゝは一八九七年に男五一、九女四八、一であつたのであるが、かやうに女の減じたことは壯年期の女が多く死ぬるといふ不明の原因によるものである。恐らく近頃男子の力が減じて、女の勞働が過ぎるためであらう。

氣候と歴史の影響が兩性の數の比に影響する。しかし民族的及經濟的影響についてまだ明に論じられぬ恨がある。しかしこの方が研究題目ではあるのだ。

八、

人口の地理的分布を決定するものは、ロシアでは三つの要素がある。氣候と地味と、植民運動の方向これである。そこで西歐のやうに一律に分布しないで、稠密の居住地と全く居住者の居ない土地が出来た、従つてこの分布を行政管區圖の上に色分けなどにして示めすわけにはいかない。故に予は *Dasymeric map* を工夫して、

之を表現し今將に刊行せんとしてゐる。この新刊行圖は歐洲ロシア及コーカサスを百萬分一、アジアロシアの西部を二百萬分一、聯邦全體を四百萬分一に表はすつもりである。予はこの地圖の上でロシア平原の聚落の上に十のちがつた型のあることを認める。予は (*Town and Village life in European Russia, 1910*) に於ても既に之を述べたのであるが、この十個の型式の中で三つが特に廣い分布をもつてゐる。

北帯に於ての聚落は主として蒐集産業(狩獵、漁業及森林生産物を拾集する)に關係し、農業者は極めて少い。従つて聚落は河谷、湖畔、海濱に限られ、水源地や苔蘚地は全く無人である。この形式は北ドビナ、オネガ、及其他の川の盆地に共通する。

中帶水源地即氷河土の被覆した處は亞麻や穀物の耕作が特色をもつ、この邊では河谷は餘程濕氣が多く、雪霜の期が永い。故に民人はその居住地を粘土質の氷河堆積丘陵地の木蔭で、可成温かい、乾きのよい所を求め、同時に地下

水があまり深くない丘端がよい。平均穀物の成熟するためには、之を谷底に比べて、丘の上では十日以上も遅くれるものであるが。

この形式はロシア平原の北西部及ヴォルガ河とオカ河の間の中心部に多い。

南帯の形式それは森林地であり草原である黒土地方の居住で聚落の集中が比較的大くその位置は屢河岸の高い峻しい高地を占める。これは春期雪解の洪水を免かれるためである。かうした場所では各聚落は自から結合して、河岸に沿ひ、ずつとつづいた帯状になる。長さ十軒にも達して、どこが村の始めでどこが村の終であるかわからなくなつてゐるのが多い。だんだん人口が増加して、移住を餘儀なくするに至つて、上流の分水界に近づくよりは、多くはシベリアへ又は北コーカシアへ移住するのである。この型式の聚落は昔は屢々アジアの遊牧民の襲撃をうけ度々森林の中へ追ひ込まれたものであるが、最早今日はその心配がない。

其他の型式は街道村落といふべき古代からの

道路に出來た村、新しい汽車途の村、ステーションの町、商業地、又は避暑地、保養地、工業地に於ける聚落、鑛業地、鑛産地、漁業地、クリミア又はコーカサスの南斜面、果樹の成生する地域に限つて存する、果樹園地といつた各種の地理的事情によるものが聚落の形式として區別されねばならぬ。

九、

聚落の密度はロシア平原では北西から南東への方向に沿うて高い。北西部の氷河被覆地ではその地形は凸凹が少く一聚落の人口は三〇乃至百人である。粘土層の聚落には一〇〇—二〇〇に増加し黒土帯まで南へくると二〇〇—六〇〇稀に一千人を超過する。黒土の限界は直ちに大聚落の限界であるといつてよい。この黒土地の最大の聚落は一萬人にも上るが、しかし純粹に農村の形質を具へて、決して町屋にはならぬ。Woelkovはその一例であるが、これはハンガリー、シシリー、バルカン地方などの全じ農産地に共通する現象である。

ロシアの聚落を廣げることには妨げとなるものは自然と歴史との二つである。ことにロシア南部の平原では河の水位がひくいことや、冬が厳しく吹雪がきついことによつて可成一所に集まつて保護し助け合う必要があり、歴史的には遊牧民の襲撃に備へるために結合し、同時にあまりに散居しては相互の交通が不便になるからでもある。しかし森林地では森林そのものが朔風から之を保護する故に、聚落は小さくなる。しかし野獸の害を免がれるためには密集を可とするのである。

黒土の北の限界は聚落の水源地居住形式と紐状河谷居住式との境をしめす。さうしてこの境目がロシアでの最も人口稠密な部分をもつ地帯である、即西 Podolia から Tanna 川とヴォルガ川會點までの地域であつて、予はこれを以て植民の主軸線と呼ぶ。何となればこゝから東方シベリヤ又は北コーカシアに出て行くものが多いからである。

米國の經濟學者カレーは植民に就いて一つの

露西亞の領土と人口

法則を述べた。曰く、「植民農業は處女地に行つて必しもその最肥の地をとらない。寧ろ植民者の有する道具にて耕しやすい土地を撰ぶものである」

この法則はロシア人に關しても同様であつてロシアの現在でも最も肥沃な黒土地に人口が最も多いわけではなく、しかしそれよりも少しく瘠せた粘土地（それは黒土の北の限界）に人口が多いのである。たゞしこの地方の地力が減却するにつれて南の方へ移つてゆくが、かゝる粘土地の人口の増加はやがてその地の工業化を伴生した。即こゝにロシアの地理的中心が出来モスコウ工業地となり、遂にこの處が經濟的に全平原と東シベリヤとを支配するやうになつたのである。

一〇、都市の發達

ロシアに於ける都市の發達には四期がある。第一期は主として軍隊の所在地に出來た、いづれの町も木造堡壘や木柵に圍まれてゐた。この國の木材の多かつたことは十四世紀にスカンヂ

ナビアの一旅行者がこの國をさして Gardhariki 「木柵の國」といつたことによつて窺はれる。かうした木造城廓を中心として放射狀の道路が各軍隊の屯田地に通じた。従つて軍事上からつくられた大多數の市街は、今日でも猶放射道路の中心を持つてゐる。

この中心に、もし石造物があれば、それは必ず *Kemal* といふ名を持つてあらう、例令はモスコウ、ニジニノヅゴロド、スモレンスク等これである。

都市發達の第二期に於て、西ロシアは漸次ポランドやリツアニアの版圖と交渉をもつことになり「マグデブルク法」によつて、その境界に近い町は通商と工業の特許をうけ、猶太人の居住を許した。これはロシアに於て最初の特許市である。これらの町は、その建築に瓦屋根タイルをもつてゐる特色がある。しかしそれは東方には廣がらなかつた。

第三期はモスコバイト國家が、ロシア帝國になつた時からである。十八世紀の始めになつて

國內統一が完成し、最早軍事上の要塞を必要としないで、むしろ統一行政の中心を必要とした時に、古い時代の木柵要塞は全くなくなつて、多くの中心圓式の市街は、その中心に四角な廣場をもつ所の方形市街に變更された。さうした廣場の中心には石造の教會寺院があり、之をめぐつて一般に石造の行政官廳が建ち並んだ。しかし市民は多く木造家屋の鐵葉屋根や片流にすんだものである。

最後の時期に入つて、それは十九世紀にはじまる。工業市なるものが發生しはじめた。全時に十九世紀の後半から、鐵道に沿ふての商業市ができた、モスコウとペテルスブルク間の、古い鐵道線路に沿へる主要な停車場は、七十七年の間にすべて立派な町になり、その附近に多くの小さい市邑が發達してきた。

シベリアの都會の最初は、純粹に軍事及支配のために建てられたから各市全様な形式をもつた。そこに居る人は軍人又は官吏か、然らざれば流刑によつて後放免された人民である。多くの

シベリアの都會は最初急いで土人を威服するた
めに建てられたが、後にさうした必要がなくな
り、全時に地理的事情の不適當な所に出來た町
は、すべて無くなつてしまつた。ポタニンが指
摘したやうに、西シベリアの貨物は廉くてかさ
の高い穀物や皮革類であるのに、東シベリアの
貨物は高價な贅澤品である。金や毛皮や茶であ
る。従つてシベリア鐵道の開通する以前に西シ
ベリアの商人は、貨物をウラル河畔の市場Hort
の年市又は其近くの市場へしか持ち運びしな
つたけれども、東シベリアの商賈は聖京やモス
コウや、ニジノヴゴロドの年市に出入した、
従つてその影響でロシアから距離は遠かつたけ
れども、東方シベリアの町の方が早く開けてゐ
た。猶前世紀に流刑された Deembrist 十二月黨
員の多數の移住によつて、東シベリアの開け方
は餘程早められた。

ロシア平原及シベリアの都會の一般状態は之
を西歐諸國に比して、程度が非常に低い。しか
もこゝ十二年間の間に破られたものがまだ恢復

してゐない有様である。聯邦の南部クリミア及
コウカサスの南の斜面の都會は特色をもつてゐ
る。そこは保養地であるために Garden Cities の
形式である。トランスコーカシア地方では都會
の中に農民の居住が多い。コルクス、中央アル
メニア、アゼルバイジャン等の都邑はそれであ
るが、チフリスとバクーがその中心都市である。
蓋しこの方面の都邑は東方の要素を多分にもつ
からである。但し黒海岸に新しく出來た町は歐
洲風であり其市街は極めて清潔である。

一、

スラヴスの植民がトルケスタンに達した時、
彼等はそこに多數の人口の多い古代からの都會
——を見出した。サマルカンド、タシユケント、
ポハラ、キバ、をはじめ多くの河岸に存する泉地
の中の都邑がそれであつた。ロシア人はこれら
の都市の美を少しも毀損することなしに、その
古都に接近してガーデンシチー様の都會をつく
つた。又統治上の必要から新しい純ロシア式の
都會をつくつた、(しかしその位置はやはり、ヴェ

ルニイ。アスカバッド。クラスノボドスクの如き古い都會の荒廢した跡である。中央アジア及タシケント鐵道の開通と共に、人工灌溉の工事も起り、多くのロシア人はこゝに移住した、従つてこれらの都市はその經濟的位置が速かに發展した。たゞしボハラ及キバ二汗國へはスラヴ人が入ることが少なかつたので、その都市も人口があまり増加しなかつた。けれどもこれらの兩汗國の町の數は三十五乃至四十に達する。これを全シベリアの町の數百に比べて多いとせねばならぬ。これらの都邑はすべて農業アジア民族のつくつたもので、不潔であり群集も多い、回教徒の遺物もあるが、とてもロシアの新市街の美には比べられない。革命以後町もかはつた、いかなる町にも工業が見出されてきた。勿論其數一千人以下の工業労働者あるに過ぎないが、しかしそれは町と、町のやうな聚落とを區別する要目である。又新しき立派な町も發生しつゝあるが、その名が以前の名と全くちがつて呼ばれるやうになつてゐるので、之を過去に比較す

るのに非常な不便がある。

二、

ソウイェット聯邦の都市の住民は一九二六年の調査では二五、七三四、四一八人で、全人口の一七・六%である。一八九七年に調査せる都市人口は十三%であつた、しかしこの計算は不體かである、町であつても町として官廳に記されてゐないのが多かつたからである。予の推定によれば當時に於て一五%を下らぬものである。一九一八年以後都會の多い西部が離れてしまつたのみでなく革命後都市の民が田舎に引込んだものも多い、それにも不拘現に都市居住者の數は過去よりも多い。これは現在の聯邦制度が、地方地方で官吏の多數を集中するからである。新らしき市街や大きくなつてゆく町は田舎の人を引きよせて、彼等に労働を與へてゐる。工場人口數は三八%も増加し、鐵道や水路に近い町並に工業都市の人口は三二%増した。之は一年に少くとも六%づゝ増加した勘定である。町の人口増加率は中央部に最大であり、レニングラー

ド及びウラル地方にその兩手を出してゐる。

一九一七年の十月革命の直後ペテルスブルグの人口は七〇〇、〇〇〇人に激減し、多くの木造家屋は焼かれたが、現在は一、六〇〇、〇〇〇人に増加した。しかしモスコウの方が更らに増加してゐる、キエフとバクはオデッサ以上になつてきた。オデッサは一九一四年以後あまり發展しない。革命後躍進した町は、ノボニコライスクである。こゝはノボシベリスクと改名されて、鐵道と大河との會點に位し、アルタイ平原の北にある黒土帯の中心、人口最密の地に位する。一八九五年にこの河岸はたゞ松林であつたが、そこが殆ど一夜にして居住地にかはつた。しかしこの發展によつて古代のトムスクはその位置を奪はれたのである。ノボシベリスクについて著しく人口を増加したのはオムスクである。こゝもイルチツシユ鐵道と水運のジャンクシオンにあたるからである。東シベリアは人口稀薄で著しきものがない。イルクツクは十萬に達しかねてゐる外、浦鹽斯徳は十萬を超へたに

すぎない。蓋し舊の大ロシアの町が發達が早くて、他の地方は遅いといつてよい。ドネツ盆地の中に於て Yuzovka は礦業のために著しき進歩をしめした。

一三、

聯邦内、スラヴ人の農業に従事するもの、交通機關は貧弱である。國內の三分一はまだ犬と馴鹿とが唯一の道具で、六分一は駱駝、二分の一は牛馬。さうして南方の少量の地で、驢、騾、水牛などが使役される。西露の地圖では屢驢の棲息の北限が、あまりに北に偏して書かれる、この動物は冬の嚴寒には堪へられぬものである。鐵道網らしいものはたゞ西部に於てのみ開けてゐるが、馬の使役地に合する。河は一年の大部分を通じて凍る、水路としての利用は少い。廣いシベリアの川は不幸にも北氷洋に注ぐのみでなく、最良のヴォルガでさへ、裏海に注ぐので海洋への交通をたゞれてゐる。自動車も悪い道路の上で、少しは通ずる、しかし政府の報告によれば一九二七年に僅か一二、〇〇〇臺を超

えんとしてゐるのに過ぎない。

一四、家の形

ユーラシア大陸に於けるスラブ植民地では、その氣候の嚴酷なる寒氣のため數世紀の間、民屋は小さく暖い住居にすることのために、北側は森林の中に材木を組んだ垣をつくり、南側の空地に藁と乾糞との堆をつくつた、民居は北側の屋根は木でつくり、中央は材木と草葺であり、南の方はカヤ、蘆などで土を以てかこうことにしてゐる。かうした木造家屋から西歐風の家にすることは好まれもせず、又急に移られない、特に二階建にすることは、暖房装置のために最も困難とせられる。又一般農民が貧乏であるために、ロシアの農村は外観は憐れである。勿論中には大きい邸宅をもち、數個の小屋を有した堂々たる農家もないわけではないが、西歐のそれとは全く様子がちがうのである。

一五、

ソヴィエツト聯邦の中には廣い土地が無人で森林狩獵者や、遊牧民の徘徊する草原が廣いか

ら、さうした所に都市が発生することはないであらう。しかし、今やさうした土地でも、新しい自治聯邦の組織が導かれたから、都市の必要が生じてゐる。そこで従來からさうした土地の周圍にあつたロシア人の町を、その開發の中心に供し、之を首邑とし、やがて之を改名することになつたのである。例令はウストシソルスクの小さいロシア境の町シリアンが、コミと改名し、カザクスタン共和國のキルギスは全じくロシア境の町。舊ベロヴクに、クシルオルダの名を與へて首府とし、ヴェルンニイはアルマタと改名し、バスキル共和國の首府はウハと定められた類これである。

全時に強制的の官語がなくなつた。ロシア語といふ一般語をやめてから、聯邦又は自治地方はそれ自身の言語をもつて差支へぬ。従來はこれらの地方語は發達せず文學にもならなうだが只今ではかうした言語も新に發達しはじめてゐる。

全時に各聯邦、ヤクーツア、カザクスタン、バ

スキリア、カレリヤ、ブリアチア等の共和國は何れもその國土の調査を自發的に希望し、レニングラードの大學へむけて調査方を依頼した。レニングラードの地質調査所(The Federal Geological Committee in Leningrad)は國內の鑛産資源の調査に従事し、モスコウの中央統計局は地方及各共和國の統計局と協力調査に任じ、

しかもそれは地方へは地方語で報告されるのである。聯邦の計划局ではすべての共和國の經濟關係を考慮して、その電化と交通の發達をはかり、各聯邦は孜孜として、各自の經濟生活の互助増進をモットウにして努力してゐるの現状である。以下略。(F)

獨逸の地理學界 (二)

寺田貞次

三、ミュンヘン大學

ペンク教授指導のアルペンエクスカーション參加の爲め、ミツテンワールトに向ふ途ミュンヘン大學を訪ねる。新しい大理石造の堂々たる建物、大廣間も無遠慮に通ると、左側に地理インスチテュートを發見した、百〇二號から百〇三號に至る四室が之に充てられて居る。當教室の主任は南極探險を以て知られてるヅライガル

スキー教授 Erich von Drygalski である、教授は一八六五年の生れ、ボン・伯林並にライプチヒに學び、極地方の探險に従事し、一八九一年頃にはグリーンランドの西岸を探險し、一九〇一年より三年迄南極探險を企て、Kaiser-Wilhelm II Land を發見した、一九〇六年以來當大學の教授となり今に至つたもので、其著には Die Grönland-Expedition d. Gesellschaft für Erdkunde (19